

# しらの 核心

第2回

## ハマグリを見つめる目

取材協力：千葉県漁業協同組合連合会

忘れた頃に届く旧友からの便りには、冠婚葬祭のお知らせが付き物です。先日も久しく会っていない友人から「結婚します」という葉書が届きました。念願のジュンブライドが叶うのだそうです。

結婚から筆者がイメージするのはハマグリです。ハマグリは上下ペアの貝が他の貝とピタリと合うことがないので、夫婦和合の象徴とされています。祝いの席の食材によく使われるのもそのためです。ただ、実際のハマグリ夫婦関係がどうかというと、これが非常にドライで、例えば産卵期でも雌雄の接触がありません。お互いの姿を確認するでもなく、雄は精子、雌は卵を海中に放出し、体外受精させるのだそうです。それから、日本の結婚式は10月にピークを迎えるらしいのですが、この月のハマグリはあまりお勧めできません。なぜなら秋口は産卵を終えた直後で、1年を通して最も身が痩せるシーズンだからです。需要の最盛期に不調のハマグリ。そのちぐはぐさに、「どこが和合だ」とツッコミを入れたくなるのは筆者だけでしょうか。

さて、ハマグリにはいくつか種類がありますが、本稿では内湾の汽水域（海水と淡水が混ざる場所）に生息する日本固有の本ハマグリを採り上げることにします。ハマグリはその名の由来が「浜のグリ（小石の意）」だという説があるように、昔は干潟一面にゴロゴロ転がる豊かな海産資源でした。それこそ縄文時代から食されてきたそうですから、まさに日本数千年の歴史ある食材です。

ところが戦後の日本が進めてきた急速な近代化が、ハマグリを窮地に追いやってしまいました。首都圏では埋立事業が盛んに行われて干潟が激減したことに加え、生活排水の大量流出によって東京湾に赤潮や青潮が頻発したため、同内湾に生息する“江戸前”と呼ばれる本ハマグリは1970年代前半に絶滅したとされています。

このような歪は社会を覆い尽くすように拡がって、このごろでは「自然と人間の共生」なる言葉が叫ばれるようになりましたが、自然界の形成原理が複雑であるが故にその道のりは平坦なものではないはず。ただそれでも、「小さかったら高く飛べ」という昔のCMのキャッチコピーのように、技術で壁を乗り越えようと努力するのが人間社会のとりえでもあります。今、様々な環境行動が産声を上げる中、ご多分に漏れず江戸前ハマグリ復活に向けた取り組みも具体的に動きはじめました。原動力になったのは、千葉県漁業協同組合連合会（以下、千葉漁連）を中心とする東京

湾の漁師さんたちです。

その活動の柱は、種苗と呼ばれる貝の赤ちゃんを大量に東京湾に放流するもので、それを毎年繰り返し行い、昔のようにハマグリが営みを定着させようという試みです。筆者はその成果を報道で聞き及ぶに至り、矢も盾もたまらず千葉漁連の東京湾漁業振興室を訪ねることにしました。出迎えてくれたのは、多田和夫室長と土江秀治さんです。



戻ってきた江戸前ハマグリ

お二人の話によると、この復活プロジェクトに最も熱い情熱を燃やしているのは、70歳を超える高齢の漁師さんたちだそうです。昔の海を知っているだけに、喪失感が奪回へのパワーになるのでしょうか。

海の荒廃は漁師さんたちにとって深刻な問題です。なぜなら生活の源泉を失いかねないからです。一方で、海を汚す原因は多くの場合陸に暮らす人間社会にあるわけですが、当事者の意識がなかなか芽生えない中、時には消費者の心無い言動に傷つけられたこともあると多田さんは言います。特に東京湾のイメージが悪かった昭和の終わりごろは、「汚物が流れ出た先で獲れたものなんか汚くて食えるか」と拒絶感をむき出しにされ、悔しい思いもしてきたようです。そんな辛い状況に置かれた漁師さんたちが、心折られることなく、むしろもう一度昔のハマグリ漁を復活させたいと思えたのはなぜでしょうか。そこには意外な事実が隠されていました。

お二人の話によると、ハマグリ復活プロジェクトが始まる前から、絶滅したはずの江戸前ハマグリが木更津あたりの海でひょっこり見つかることがあったというのです。つまり汽水域のどこかで細々と種がつかわれていたこととなります。また、東京湾で毎年放流されるアサリの種苗に本ハマグリ種苗がわずかながら紛れ込んでいて、それが運よく海の生存競争を勝ち抜

くケースも考えられるということです。漁師さんたちはそうした小さな幸運に巡り合うたび、消えかかったハマグリへの想いを再燃させてきたのだといいます。

ちなみに、幸運の江戸前ハマグリが市場に出回ることはまずありません。漁業関係者の特権といったところでしょうか。焼ハマやフライなどに調理され、漁師さんの胃袋に収まります。



焼ハマは漁師料理の定番

「ああ、うまい。やっぱりこの味が忘れられない」。

心の底から湧き出るこの感情が、実は漁師さんたちを江戸前ハマグリへの復活へと奮い立たせた最大の動機だったのです。

そんな思いから立ち上がったプロジェクトですが、当初は2つの不安を抱えていたといいます。それは、今の東京湾に本ハマグリを育む器量があるかという点と、復活に欠かせない種苗が安定的に手に入るかという問題でした。まず1点目ですが、手始めに熊本産本ハマグリを試験的に木更津の海に放流したところ、特に問題なく成長することが分かったそうです。その後、貝類が棲むには厳しいと見られていた京浜運河付近でも実験(国立環境研究所)が行われましたが、ここでも安定した生育が確認されたそうです。そして特筆すべきはその生命力の強さで、アサリが死滅する酸素の少ない状態にも本ハマグリは耐えてみせたというから驚きです。ちなみに、そこまで生命力が強い本ハマグリがなぜ姿を消したのかということ、最大の繁殖スポットである広大な干潟が埋め立てられてしまったことと、産卵時期が年に1度しかないことが影響したと考えられているそうです。

それから2番目の種苗の入手の問題ですが、一番望ましいのは今でも本ハマグリが獲れる熊本などの産地から種苗を分けてもらうことです。ただ、当時ほとんど本ハマグリが減少が深刻化していて、とてもそんな依頼ができる状況ではなかったといいます。そこで目を付けたのがお隣の国、台湾です。台湾では20年以上も前から種苗の人工生産が取り組まれていて、日本にはない技術があるといいます。そこで有明海の本ハマグリを同国に持ち込み、平成16年秋に種苗生産を開始したところ、すぐに期待通りの成果が現れて、約1年半後には20トンの種苗を日本に持ち帰ることができたといいます。また、その後も種苗を増やして放流を繰り返し、今

では年間50トンの江戸前ハマグリを水揚げできるまでにプロジェクトは拡大したとのお話でした。

この調子でいけば、江戸前ハマグリが手ごろな値段で食卓に並ぶ日はそう遠くないかもしれません。そんな期待が高まりますが、当の関係者たちは一様に慎重な姿勢です。それは、下水道等の整備が進んだ今でも、東京湾に流れ込む水には問題があるからだそうです。

実は筆者が千葉漁連を訪れた時に聞いた第一声は、「海がきれいになったからハマグリ復活事業がスタートしたと思われては困ります」というものでした。そこには若干怒りの感情も滲んでいたように思います。



ハマグリ漁の様子

ではなぜ怒りなのか。それは、東京湾の“今”が、“陸の目線”だけで語られる節があるからです。例えば、何気ない日常会話に「東京湾がきれいになった」という言葉が出てくることがありますが、多くの場合は陸(都市)の生活者の視点で発せられていて、そこに海からの視点はほぼ含まれていません。もっと言えば、「今日も川は砂を運んでいるだろうか」と日頃から考えて暮らしている人が街にどれだけいるかというと、残念ながら少ないのが実態です。それは、川が砂を運ぼうと運ぶまいと、目に映る暮らしの場面に変化が生じないためです。逆に、大雨が降ると川の氾濫を心配したりしますが、それは浸水や交通網の混乱など暮らしへの影響が容易に想像できるからです。これが陸の目線です。

多田さんたち漁業関係者が望む水は、砂や窒素をほどよく含み、流量や水質の変動が小さく、干潟や干潟の生物を健全に育ててくれる水です。言い換えれば漁師さんたちの暮らしを守ってくれる“安定した水”のことで、実はこの“安定”がとても重要です。水の流れを追えばわかるように、陸で起こったことは必ず海に影響しますから、日頃の陸と海の関係づくりが良好であっても、陸側で起こりうる一度の横行がすべてを台無しにしてしまう可能性があります。ですから、いかなる場合でも街のツケを海にまわさない“陸の覚悟”が必要で、それを行政と市民がどう固めていくのが今後の課題になるはずで

人々が海に身を委ねるような視線で水を語りはじめた時、本当の意味で江戸前ハマグリへの復活が見られるような気がします。

(筆者：中山 勲)